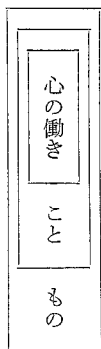


言語体系の構造

室 伏 武

一 言語体系とは何か

言語は、人間相互の伝え合いの媒体であり、さまざまな観念を伝達する記号体系(symbol system)である。この記号体系としての言語は、表現主体の「心の働き」が、「こと」に展開され、それが「もの」によって表現されたものである。この「もの」は、「心の働き」が「こと」「に、この」「こと」「が」「もの」としての言語記号と言語記号体系に記号変換された表現形式である。それは、「心の働き」「+」「こと」「を連ぶものである」と言うことができる。この言語体系は、「心の働き」「こと」「もの」との統一体であり、



のように入子型構造の形式⁽¹⁾で表わすことができる。そして、この構造形式は、また、

心の働きロことロもの

としての表現過程において体系化されるものであり、「心の働き」「こと」が「もの」に集約されることをも意味している。このような言語体系において、

(1) 「心の働き」とは、表現主体の「心(意)」であり、表現活動の中核をなすものである。「心の働き」が、「こと」を形成し、「もの」を構成して、その「心」を伝える。この「心の働き」は、表現主体が表現しようとする「意図」ないしは「主題」の形式において具体化されるものであると言える。この意図は、表現主体の自我体系から生まれ、その「思惟形式」によって決められるものである。それは、まだ「構想」の段階であり、言語体系として形成されない。このように「心の働き」は、表現主体の主観に基づいているために、言語体系が、主観性を具有することになると言える。(意図＝主題)

(2) 「こと」とは、「事」であり、伝達しようとする「内容」である。この「内容」は、表現主体の心の働きである「意図」が、「こと」として具体的に展開されたものである。それは、表現主体が、その伝達意図を「論理的形式」によって、伝達内容を構成するものである。この伝達内容は、表現主体(自我体系)が具有している「知識体系」に基づいて構成されるものである。そして、この「内容」の構成は、音声、文字の形態をとらない言語体系によって展開される。(伝達内容)

(3) 「もの」とは、「言」であり、音声、あるいは文字の形態によって表現された「言語体系」である。この体系は、伝達内容が記号変換されたものであり、言語記号が「線表現形式」によって、体系的に順序づけられ、伝えるという働きを持つものである。この伝えるということは、理解主体との関係において表現されるものであり、そ

こには、規範性が要求される。(言語体系)

これらの「心の働き」「こと」「もの」とは、それらが個々に存在しているのではなく、人間の「生きる」ということに統一されることによって「言語体系」が成り立っている。それは、言語体系が、言語生活において存在しているからである。



(一) 言語体系の構成要素

このように言語は、言語記号と言語体系とから成り立っている。言語記号は、その表現面(能記)である外的形態(外語)と、その内容面(所記)である内的意味(内語)との二つの面を持っている。この言語記号は、それらが関係づけられ、体系化されることによって言語体系が構成される。この言語記号や言語体系が構成されるためには、その構成法則(symbolic cord)を持ち、それによって体系化されるものである。

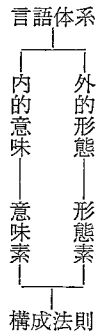
- (1) 言語は、伝え合いの媒体である。この媒体は、記号と記号体系の形態において表現されたものである。それは、表現主体の「心の働き」+「こと」を伝える「もの」であり、表現過程を通して表現される。(媒体 || 伝達意図 || 伝達内容 || 記号体系)

- (2) 言語は、記号として、音声、および文字を用いている。この言語記号は、形態素から成り立ち、意味を表わす

ものである。この言語記号は、言及対象を抽象的に一般化(普遍化)して表現する論理的記号である。それは、言語と言語でないものとを区別するものである。(言語記号)

- (3) 言語は、記号の体系として存在している。この体系は、「語」を単位として、それらが相互に関連し合いながら有機的な統一体として存立している。この組織体は、その「構成法則」によって体系化されている。この「語」の組み合わせは、多様性を持ち、その表現内容が豊かなものになっている。この言語体系は、論理的であり、線的(時間的)であり、規約性に富んでいる。(構成法則⇨言語体系)

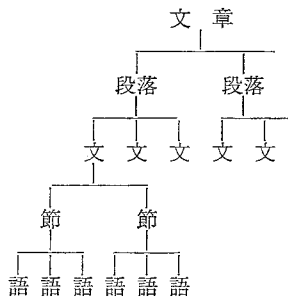
このような言語体系を構成する要素は、それぞれ独立した統一体であり、それらは、さらにいくつかの要素から成り立っている。外的形態としての言語記号は、形態素の統一体であり、内的意味としての言語記号は、意味素の統一体である。言語体系は、「語」「節」「文」「文章」の単位体の統一体である。これらの構成の要素は、それぞれの要素と、その統一体である言語記号、言語体系とが、それぞれの構成法則によって体系化されるものである。



(二) 言語体系の構成

このような有機的な統一体としての言語体系は、それを構成する「単位」と、それを関係づけ配列して体系化する「構成法則」とから成り立っている。

この言語体系における「単位」⁽²⁾は、体系を形成する基本となるものであり、それ自体、独立した統一体である。こ



の単位は、言語記号として外的形態と、それに対応する内的意味とを具有するものである。前者は、形態論として、後者は、統辞、修辞、姿として、それぞれ「構成法則」によって構成されている。この単位は、「語」であり、言語記号として最も基本をなすものである。この「語」は、

s a · k u · r a || サクラ / さくら / 桜

のように s a k u r a という音韻と、かな・漢字の文字との関連において外的形態を構成している。それに対応しているバラ科の落葉喬木である「桜」の概念を表わす内的意味を具有している。それらには、「桜」という単純語として自立しているものと、「桜」と「雨」とが結合して「桜雨」という複合語とがある。この「語」には、概念を表すもの(詞)と、「てにをは」と言われる関係を表わすもの(辞)とがある。「語」が言語体系のなかで機能を持つとき、その形は、「節」と呼ばれる。「節」が「句」あるいは「文」となる。そこには、「係り・受け・結び」の構成がなされている。「文」の構成は、例えば、

桜の花が咲く。

という文は、外的形態として、

サ ク ラ ノ ハ ナ ガ サ ク。

という音声の単なる線的な連続ではない。それ自体、形態的に独立体である。それは、同時に、「サクラ」という形態が「桜」の内的意味である概念を表わし、「の」という形態が「桜」と「花」との間の関係概念を表現して関係づけ、「花」の内的意味を限定しており、「桜の花」という概念を表わしている。「が」

は、「桜の花」と「咲く」との主格関係を指示するものであり、「咲く」という概念と、「咲く」という判断と述語的陳述を表現している。それは、構文論によって統一された完結した形を具有している。「段落」は、文と文との関係において小主題（主題の分節）によって統一された文の集合体である。そしてこれらの「段落」が大主題によって統一され完結されることによって「文章」が構成される。「段落」「文章」は、構文的な構成であるというより、「主題」による構成であり、「起・承・転・結」「序・破・急」「序論・本論・結論」などの構成法による。このような言語体系は、「語」を単位として、「節」「文」「文章」へと展開し、完結した統一体となる。

次に、この言語体系は、それが体系として存在するためには、「単位」が、「構成法則」によって構成されなければならない。この法則は、「語」を線的に順序づける「統辞（構文論）」と、表現方法としての「修辞」と、言語体系の全体としての「姿（ふり）」との三つのものがあり、これらは、相互に関連し合っている。「語」は、それ自体、概念を表わすものであるが、言語体系に組み込まれることによって、文章を構成する基本的要素となるものである。「統辞」は、「語」を相互に関連づけ順序づけて「文章」として完結した統一体を構成する法則である。「修辞」は、統辞と密接に関連しながら「説得」のための表現技法である。「姿」は、統辞、修辞との関連において、「文体」としての全体像であり、表現主体の「心の働き」が表わされたものである。このように言語体系は、



として表現することができる。

このような言語体系の研究は、これまで、外的形態から説明しようとするもの、内的意味から明らかにしようとするものや、構文論から分析しようとするものなどがある。しかし、言語体系は、その構成要素を中心に研究しても、その全体像を説明することはできない。本来、言語体系は、表現主体の表現の働きの所産として存在するものであるから、表現主体の「表現過程」において明らかにされなければならない。本稿は、言語体系を表現と理解の媒体としてとらえ、「心の働き」「こと」「もの」の統一体として説明しようとするものである。このことは、外的形態と、内的意味と、その構成法則との統一体としてとらえることである。それは、「文章」を新しい視点から説明しようとすることである。

二 言語体系における線の表現形式

このような言語体系は、表現主体の「心の働き」としての思惟的形式と、「こと」が具有している論理的形式と、それらの表現である「もの」が持っている線の(時間的)構造との統一体である。「心の働き」と「こと」との「もの」としての統一、つまり、言語的統一であると言うことができる。それは、「内語」を「外語」に記号変換することであり、体系化することである。

この言語体系の性格は、「語」が一列に順序づけられていて、一本の「線」として表現されている。この線の表現形式は、「こと」が、時間的、連続的で、分節的に並んでいる。それは、「数珠玉と同じように一個ずつ順に緒に通ざれているように順序づけられている」ものであり、論弁的形式であると言うことができる。⁽¹⁶⁾

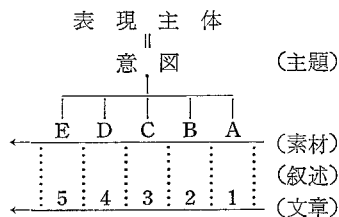
(一) 「心の働き」——思惟的形式

言語体系における「心の働き」は、表現主体が表現しようとする「意図」として作用する。この「意図」は、表現主体の意識の志向作用であり、「素材」を通して展開し、「こと」を構成する。それは、認識とその過程であり、思惟的形式によって表現されるものである。

この表現主体の心的作用は、

- (1) 対象に則して述べる
- (2) 心に則して思う

ことの二つの面がある。前者は、意識が対象に対して客観的に表現するものであり、後者は、意識の対象に対する主観的な表現である。これらは、また「論理的」なものと、「心情的」なものがある。そこには、表現主体の思惟的形式が介在し、個性的に表現されるものである。



次に、この表現形式は、表現主体の「意図」の表現である。それは、言語体系における中心となる思想であり、普通、「主題」と呼ばれるものである。この「主題」は、言語体系を統一する働きを持つものである。それは、中心思想とそれを構成するいくつかの小主題とから成り立っている統一体である。この主題の構成は、思惟的形式によって形成される。この主題は、小主題から成り立っているように、それを構成する「素材」の様式において表現される。論理の展開であり、「こと」を形成する。この「意図」、「主題」と、「素材」との関係は、一体的なものであり、抽象的な「意図」が、「素材」の様

式に変換され具象化されたものである。この表現過程によって、論理性が生成される。この「素材」が言語体系によって叙述されることによって、「文章」化される。したがって、「素材」と「文章」とは、一体的に存在している。

このように「心の働き」は、思惟的形式において、「こと」を構成する作用をしている。この思惟的形式は、言語による自己表現であり、そこには、日本人としての思惟的構造が基盤として存在している。欧米の話し言葉中心の「おしゃべり」文化に対して、わが国の文字、活字文化⁽⁷⁾読書文化を中心とする「だんまり」文化⁽⁸⁾における思惟的構造は、集団の論理からの他律の行動原理⁽⁹⁾に基づいたものであり、自己表現を表わす度合いは低い。このことは、例えば、「私は、……」という主語を持たない「文」が一般的であることでも理解できる。

(二) 「こと」——論理的形式

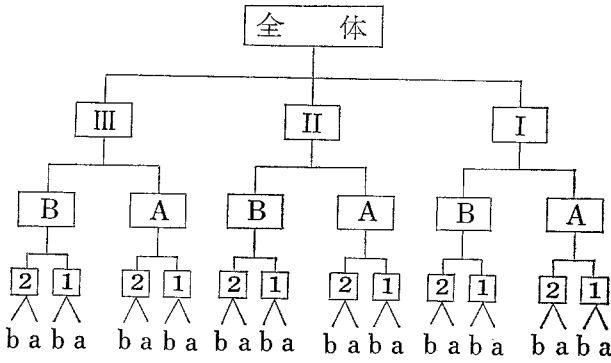
言語体系における「こと」は、表現しようとする意図が、素材を通して、内容として構成されたものである。この表現内容は、その全体像（構想）が形成され、それが具有している構図や階層性が、言語化するために線的な論理に変換されたものである。この線的な論理の展開は、言語としての形態をとらないが、内語としての言語体系の性格を有するものである。そこには、論理的形式が支配している。

この論理的形式における論理の展開は、主題が素材によって繰り広げられたものであり、それは、構図的であり、階層性を持つものである。この構図性は、五段階、四段階、三段階、二段階などがある。これは、主題の小主題への分節であり、同時に、文章における段落である。これらには、

序（序論）

破 (本論)
急 (結論)

のような三段階の形式のものや、



起 大阪本町糸屋の娘、

承 姉は十六、妹は十五。

転 諸国諸大名は刀で斬るが、

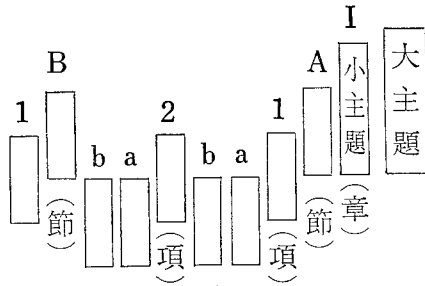
結 糸屋の娘は目で殺す。

承は、起を受けて、主語述語の関係を構成しつつ、それが転結の結合した述語に対して主語の位置に立つものである。⁹⁾これらの小主題(あるいは段落)は、さらに主題が細分される。そこに、論理の展開における階層性を具有するものである。それは、主題が概念として展開されるからであり、単なることからの羅列ではない。そこに論理的形式が存在すると言うことができる。

この全体の構図は、そのままでは言語体系となることができない。そのためには、全体像を、線に変換しなければならない。この線への変換は、段落、文、句、節という単位体に連続させることによって表現するものである。この線性は、絵柄のあるセーターを、一本の毛糸にほどこするようなも

対象に則して叙述する論理的形式として、対象について時間の順序に従って表現するものである。それは、時間の概念によって、線的、連続的に素材を配列することであり、時間の流れ、あるいはその逆転に基づくものである。この時間的順序は、

(ア) 時間的順序



のである。そして、理解主体は、この毛糸を編んで、表現主体が編んだ絵柄のセーラーを再構成することであると言うことができる。それは、一本の線である。したがって、この線をその表現しようとする内容に従って、区切りをつけることによって、はっきりと伝えられるようにしなければならない。そこには、論理の展開があり、順序づけとしての統辞があり、表現としての修辞があつて、姿(文章)を形成することができる。

この表現内容を構成するのは、その論理的形式によって形成される。この形式は、統辞、修辞、姿とが一体となったものであり、表現主体の「意図」に基づいて展開される。それには、時間的順序、空間的順序、論理的順序、心理的順序の四つものがある。

- (1) 「時」の概念や認識を背景とするものである。それには、物理的、文化的、個人的、公的なものなどがある。
- (2) 素材の「時」によって配列されるものがある。
- (3) 「時」による順序づけであり、それは因果関係の論理的形式である。

とすることができる。この時間の論理は、現実の「時」を超えるものであり、過去の記述である。しかし、そこには、分析的論理的形式であって、現在、未来への推論がなされることを特徴としている。

(イ) 空間的順序

次に、対象に即して叙述するものに、「空間」的順序づけがある。対象となる空間を、ある視点から分解し、線的に表現するものである。この空間的順序は、

- (1) 「空間」に対する概念や認識に基づくものである。それには、物理的、文化的、個人的、公的ななどがある。
- (2) 対象の視覚的な記述であり、その視点による面を線的に分解し、その全体像を表わすものである。
- (3) 空間を線の順序に変換するものであり、空間認識の論理的形式である。

とすることができ、空間を部分に分解し、線的に表現し、全体像を再生するものである。それは、構造的であり、直観・総合的な論理的形式である。

(ウ) 論理的順序

心に即して叙述する論理的形式として、論理的順序づけがある。この論理的順序は、

- (1) 一般から特殊へ、特殊から一般へ
- (2) 具象から抽象へ、抽象から具象へ
- (3) 原因から結果へ、結果から原因へ

などがある。この形式は、明せきな「説得」をするためのものであり、統辞と修辞との一体的な論理である。つまり、これは、「わかる」ための論理的形式である。

(工) 心理的順序

次に、心に即して叙述するものに、心理的順序がある。それは、表現主体の感情の表現である。この心理的順序は、

- (1) 表現主体の「心情」の直接的な表現であり、主観的な感情表現形式である。
- (2) 対象に対する「心の働き」の記述であり、直観的な論理によるものである。
- (3) 感情の表現形式であり、感情の論理的形式である。

とすることが出来る。この順序づけは、心情に訴える力があり、「説得」する論理的形式である。

このように言語体系における論理的形式は、音声、文字の形態によらない言語であり、表現主体の表現過程における表現形式であると言ふことができる。

(三) 「もの」——線的表現形式

言語体系における「もの」は、「こと」を言語の形態で表現されたものであり、記号体系として存在している。それは、「こと」が具有している論理的構造と、「もの」が持っている線の構造の統一体であり、「こと」を「もの」として言語的統一されたものである。この言語的統一は、「言語的論理の法則」によって、言語記号によって体系化することである。それは、「語」の論理と、「叙述」の論理であり、「線(時間)」としての論弁的思考によって展開されるものである。別の言い方をするならば、「表現」の論理であり、言語記号の線の順序づけの論理的形式であると言ふことができる。

室 伏 武

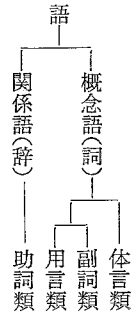
(ア) 言語体系の単位としての語

言語体系は、それが構成される「単位」と、それを順序づけ体系化する「構成法則」とから成り立っている。この単位は、言語体系を構成する基本的要素であり、それ以上分解できないものである。同時に、この単位が集合して言語体系が成り立つための要素でもある。日本語文法学において、言語体系は、文章と呼ばれる構成体であり、この文章は、段落、文、句、節、語といった単位体から成り立っているとされている。この単位体は、それぞれ完結性を持った統一体である。⁽¹⁰⁾しかし、文章は、「語」が基本となり、文が構成され、文が集合して段落を形成し、文章として成立すると言うことができよう。

この言語体系を構成する基本となる単位としての「語」は、意味を具有する最小の単位であり、言語としての外的形態とそれに対応した内的意味を有する統一体である。江戸時代の富士谷成章は、語を四つに分類し、「名(な)、装(よそい)、頭挿(かざし)、脚結(あゆひ)」と人体にたとえている。物事の本体である「名」が、衣装をつけ、かんざしをさし、足ごしらえをしている人の姿(文)を表わしている。「名」は、体言(名詞)、「装」は、用言(動詞・形容詞)、「頭挿」は、副用語(副詞・連体詞・接続詞・感動詞など)、「脚結」は、附属語(助詞・助動詞)に相当するものである。また、鈴木胤は、「詞(体ノ詞・作用ノ詞・形状ノ詞)」と「テニヲハ」とに分け、その関係は、

三種ハ物事ヲサシアラハシテ詞トナリ、テニヲハ、其詞ニツケル心ノ声也。詞ハ玉ノ如ク、テニヲハ、緒ノゴトシ。詞ハ器物ノ如ク、テニヲハ、其ヲ使ヒ動カス手ノ如シ。

と詞とテニヲハを区別している。これらの語論は、山田孝雄の「観念語」と「関係語」の考え方、橋本進吉の「詞」「辞」、時枝誠記の「詞・辞」論、渡辺実の「素材を表示する」ものと、「関係構成する」ものとする考え方に展開する。それは、



と、分類することができる。この「語」は、「文」を構成する要素であり、統辞論の枠組みにおいて作用するものである。「文」を完結させる働きを果たす「辞」が、その最終末尾にくる。それを「陳述」と呼び、叙述辞、述定辞、伝達辞とから成り立っている。⁽¹¹⁾このことは、日本語の言語体系における特徴であると言うことができる。

(イ) 言語体系における統辞

日本語は、その統辞的性格から見て「膠着語」であると言われている。それは、素材を表現する語に、動詞・助動詞・助詞の類が後から後へとつけ加えることができる性質を持ったものである。このような「文」の構造は、入子型構造形式によって表わすことができる。この形式は、語(詞・辞)の配列と統一の構造をなすものである。⁽¹²⁾「桜の花が咲いた」は、



というように表わすことができる。このように「文」における「語」の配列方法は、

- (1) 表現主体が表現しようとしている「主題(素材)語」と、その心(意図)を表わす「述語」との二つ部分の組み合わせである。それは、主題語 述語 という構造であり、時枝誠記の 詞 辞 の形式である。「花」

という概念を表す語は、「が」という「格」をそのなかに持ちながら、「咲いた」と言う述部の「言い切り」の文末が呼応して、「花が咲いた」という文を完成させる「題述関係」によって表現される。

(2) このように、表現主体が「こと」について思う「心の働き」が、「文末」において表現されることになる。陳述、判断が、文の終りまでこないとわからないと言うことである。この「文末決定性」は、題述関係から生ずるものである。このことは、その距離が遠くなると、首尾の不照応となったり、題述のねじれなどが起こりやすい原因となっている。

とすることが出来る。これは、「ギリシア語」「ラテン語」などの語形変化をする「屈折語」、「中国語」のように文中の語の位置で決める「孤立語」に対して、「日本語」「蒙古語」などのように、語幹に動詞、助動詞、助詞を続けていく配列の仕方をしている「膠着語」の特徴でもある。

(ウ) 言語体系における修辭

「語」「文」の配列には、統辭による順序づけとともに、修辭によるものがある。これらは、表現主体の論理的思考による「こと」を「もの」へと記号変換するための構成法則であり、「語」「文」を順序づけるものである。なかでも、統辭は、配列方法にかかわるものである。これに対して修辭は、「文」「文章」の表現方法である。前者は、「順序づけ」の論理であり、後者は、「説得」の論理であると言うことができる。そして、両者は、「文」「文章」として統一されるものであって、別々に存在するものではない。この「説得」の論理は、

- (1) 「こと」の論理的展開において、演繹法、帰納法や比喩などの方法によって展開されるもの
- (2) 「もの」の線的展開において、強調、省略、語調、くりかえし、倒置などの方法によって展開するもの

とがある。このように修辭は、言いまわしであり、表現主体が理解主体への「呼びかけ」「語りかけ」の方法である。
(エ) 言語体系における姿

このようにして、言語体系は、「文章」として、一つの姿を具有することになる。この姿は、一つの「文章」の全体であり、それは表現主体の全人間が表現されたものである。したがって、個性的であり、人間性が表現されたものである。別の言い方をするならば、言語体系は、表現主体の「心の働き」より出でて、「心の働き」に帰るものであり、言語記号の体系は、表現主体の「心」で、そのすべてが包まれていると言うことができる。したがって、この「姿」は、

(1) 言語体系の総体である。それは、言語体系が表現主体の主体的な表現であり、論理の展開である。このことは、表現主体の「自己表現」のすべてであることを意味している。

(2) 表現主体の表現に対して、理解主体や第三者から「見られる」自己表現である。それは、鏡に映された「姿」としての面がある。

と言うことができる。「文は、人なり」といわれる理由がここにあると言える。

武 室 伏
このように言語体系は、表現主体の「心の働き」「こと」「もの」との統一体としての言語記号体系であると言うことができる。この体系は、「日本語」としての固有なものであるばかりでなく、そこには、日本人が持っている論理や思考の構造を基底として展開される民族性がある。

注

- (1) 時枝誠記 国語学原論 岩波書店 一九四一年 三二七頁。
 (2) 宮地裕 日本語の文法單位体(岩波講座 日本語 6 文法 I 岩波書店 一九七六年 一一三二頁)。この論文において、
 文法学的対象としての單位体について論じ、次のようにまとめている。

單位体						單位体構成
モーフ	語	節	句	文	段落	
成立						
関係	成立					
		成立				
			成立			
				成立		
					成立	
						文章構成
						段落構成
						文構成
						句構成
						節構成
						語構成
						文章構成

(3) 宮地裕 前掲書 一七一—一八頁。

(4) 渡辺実 国語構文論 塙書房 一九七一年 六六頁。

山田孝雄、時枝誠記の線上に立って、「文」の完結性と統一性を構文論的に完成した(北原保雄 文の構造 △岩波講座 日本語 6 文法 I 岩波書店 一九七六年 三五—四一頁▽)。

渡辺は、「桜の花が咲く」という文を形態、意義、職能から分析し、叙述内容を素材として陳述が発動して成立するとしている。

- (5) Langer, Susanne K., *Philosophy in a New Key*, Harvard University Press, 1960, p. 80.
- (6) 室伏武 言語生活と読書 (亜細亜大学教養部紀要 第一四号 一九七六年一月 三六頁)。
- (7) 荒木博之 日本人の行動様式——他律と集団の論理 講談社 一九七三年 (講談社現代新書)。
- (8) デイーン・C・パーランド 西山千訳 日本人の表現構造 サイマル出版会 一九七三年。
- (9) 時枝誠記 文章研究序説 明治書院 一九七七年 (時枝誠記博士著作選Ⅲ) 七一一—七二頁。
- (10) 時枝誠記 日本文法 口語篇 改版 岩波書店 一九七八年 (岩波全書)。
- (11) 永野賢 日本語の思考様式 (教育学会全集 5 言語と思考 小学館 一九六八年 九一—九五頁)。
- (12) 渡辺実 国語構文論 塙書房 一九七一年。

